A Pattern Language for Consultaion of Heritage Inheritance for Individuals and Their Famlies

遺産相続の相談のためのパターン・ランゲージ

Ayano Hosotani　Hosotani’s Certified Administrative Procedures Legal Specialists Office

Chieko Horinoue　Chieko Horinoue’s Certified Administrative Procedures Legal Specialists Office
YASUO HOSOTANI　HOSOTANI’S CERTIFIED ADMINISTRATIVE PROCEDURES LEGAL SPECIALISTS OFFICE

Heritage inheritance is something everyone has to carry out as their own problem, and smooth execution is ensured by making advance preparations such as making a will in advance and building relationships with trusted experts.

But in reality, we often face the problem of inheritance without preparation.

And in a limited amount of time, it is difficult to reach a heritage inheritance that the person and family can convince.

We propose a pattern language that focuses on consulting with specialists, which can be a great help for individuals and their families to reach a convincing inheritance.

.

Categories and Subject Descriptors: A.0 [GENERAL]: Consultation of Heritage Inheritance

Additional Key Words and Phrases: None

ACM Reference Format:

Ayano, H. and Chieko, H. and Yasuo H 2020. A Pattern Language for Consultation of Heritage Inheritance for Individuals and Their Families HILLSIDE Proc. of Conf. on Asian PLoP 2020, 19 pages.

Permission to make digital or hard copies of all or part of this work for personal or classroom use is granted without fee provided that copies are not made or distributed for profit or commercial advantage and that copies bear this notice and the full citation on the first page. To copy otherwise, to republish, to post on servers or to redistribute to lists, requires prior specific permission. A preliminary version of this paper was presented in a writers’ workshop at the 9th Asian Conference on Pattern Languages of Programs (AsianPLoP). AsianPLoP’20, March 4th - 6th, 2020, Taipei, Taiwan; (due to COVID-19 pandemic, the conference was held online September 2nd - 4th, 2020;) Copyright 2020 is held by the author(s). HILLSIDE 978-1-941652-15-2

1. はじめに

遺産相続は誰もが自分自身の問題として実行しなければならない事であるため、年齢に関係なく、自分自身の問題として捉え、心身が健康な内に遺言書の作成や専門家との信頼関係の構築などの事前の準備を実施しておくことが重要である。しかし、実際には遺産相続を自身の問題として捉えずに、余命宣告を受けるなどにより、急に自身の遺産相続の問題に向き合わなければならなくなるケースが多い。そのような状況において、限られた時間の中で、本人・家族が納得する遺産相続に辿り着くことは困難である。一方で、遺産相続に関しては、行政書士、弁護士などの専門家に適切に相談することが大きな助けになるが、短時間で本人が、自身が信頼できる専門家に辿り着き、相談することは難しい。そのため、本論文では、余命宣告を受けた本人が短時間で自身が信頼できる専門家に辿り着き相談することができるためのパターンおよび、健康な間に遺産相続

について考えて信頼できる専門家と繋がるためのパターンを抽出し提案することにより、遺産相続の問題解決に寄与する。なお、本論文は、著者らによる「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」（AsianPLoP2019）における課題である「遺言や専門家との信頼構築などの事前準備の浸透に寄与するパターンへの拡張が必要である」（細谷・堀ノ上、2019）への対応として、健康な間に遺産相続について考えて信頼できる専門家と繋がるためのパターンを追加し、再構成したものである。

2. 先行研究・事例

遺産相続のトラブルを防止するためには、早い段階で信頼できる専門家と関係を構築することが重要であるが、遺産相続に関する既存の論文、文献は、「専門家に向けた遺産相続の支援について」「本人や家族が実施する手続きの方法について」「エンディングノートなどのどのような情報を記録、整理すべきかについて」に関する内容がほとんどであり、本人・家族が利用できる専門家との関係構築のための情報が不足している。本論文は、専門家との関係構築のための情報を、本人・家族の持つ様々な状況に対応できるパターン・ランゲージという形で提供することで、多くの人の遺産相続に対する準備の助けになることを目的としている。

3. パターン一覧

本論文にて提案するパターンの一覧を以下に示す。これらのパターンは、遺産相続の相談および手続きの実務者である著者の経験に基づき抽出した。
身近な事例（1.1）現実を突きつける(2.2)、より信頼できる判断(2.3)、専門家との答え合わせ（3.1)は家族や友人など本人の身近な人のためのパターンであり、それ以外のパターンは本人のためのパターンである。

No	パターン名	要約	本人	家族 友人
1.まだ健康な人が遺産相続に関するトラブル予防の相談をするためのパターン				
1.1	身近な事例	本人に真剣に考えてほしい家族、友人などが、相続で大変なことになった事例など話すことで、真剣に考えることを促す。		○
1.2	ファーストステップ	情報収集など、まずは遺産相続についての最初の行動を開始する。	○	
1.3	状況の整理	自分の状況を把握するために、事実と自分の希望を整理する。	○	

No	パターン名	要約	本人	家族 友人
2.余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターン				
2.1	身近な人への相談	一人で抱え込まずに身近な家族あるいは友人に相談してみる。	○	
2.2	現実への向き合い	前に進むために、現実を突きつける。		○
2.3	より信頼できる判断	より信頼できる別の病院に検査してもらい納得できる診断をしてもらう。	○	○
2.4	自分なりの情報収集	残された時間で何をしなければならないか自分なりに情報収集する。	○	
2.5	相談の準備	短時間の相談時間を有効にするために事前に準備をする。	○	
2.6	依頼すべき理由	専門家に依頼すべきかどうかを判断するために、専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。	○	
2.7	専門家の選択肢	専門家にも行政書士、司法書士、弁護士など状況によって最適な選択肢があることを知る。	○	
3 共通のパターン				
3.1	専門家との答え合わせ	自分で調べた情報で出した結論に固執してしまっている人に対して、専門家と答え合わせをすることを薦めることで、軌道修正を行う。		○
3.2	無料相談	市町村で開催している無料相談に参加し、専門家に相談する。	○	

4. パターン関連図

パターン同士の関連を示す。図における矢印はパターンの適用順序を表す。

3.1　遺産相続トラブルの予防に関するパターン

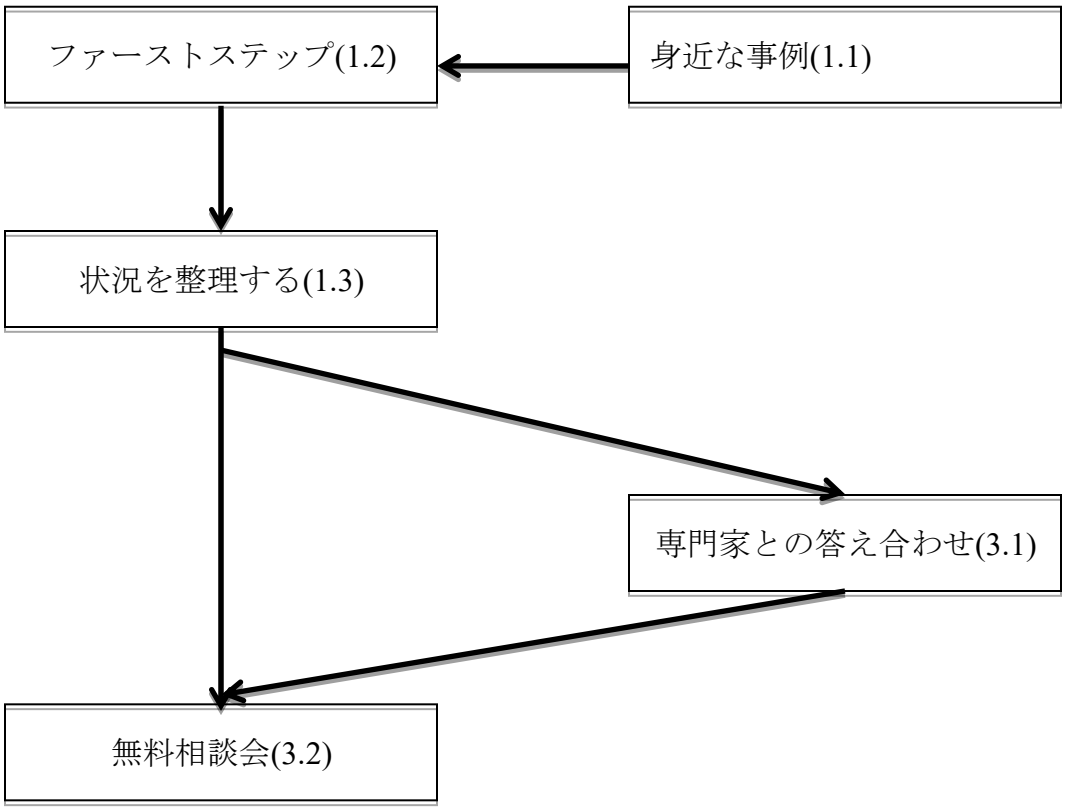

図 1 パターン関連図（まだ健康な人が遺産相続に関するトラブル予防の相談をするためのパターン)

3.2　余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターン

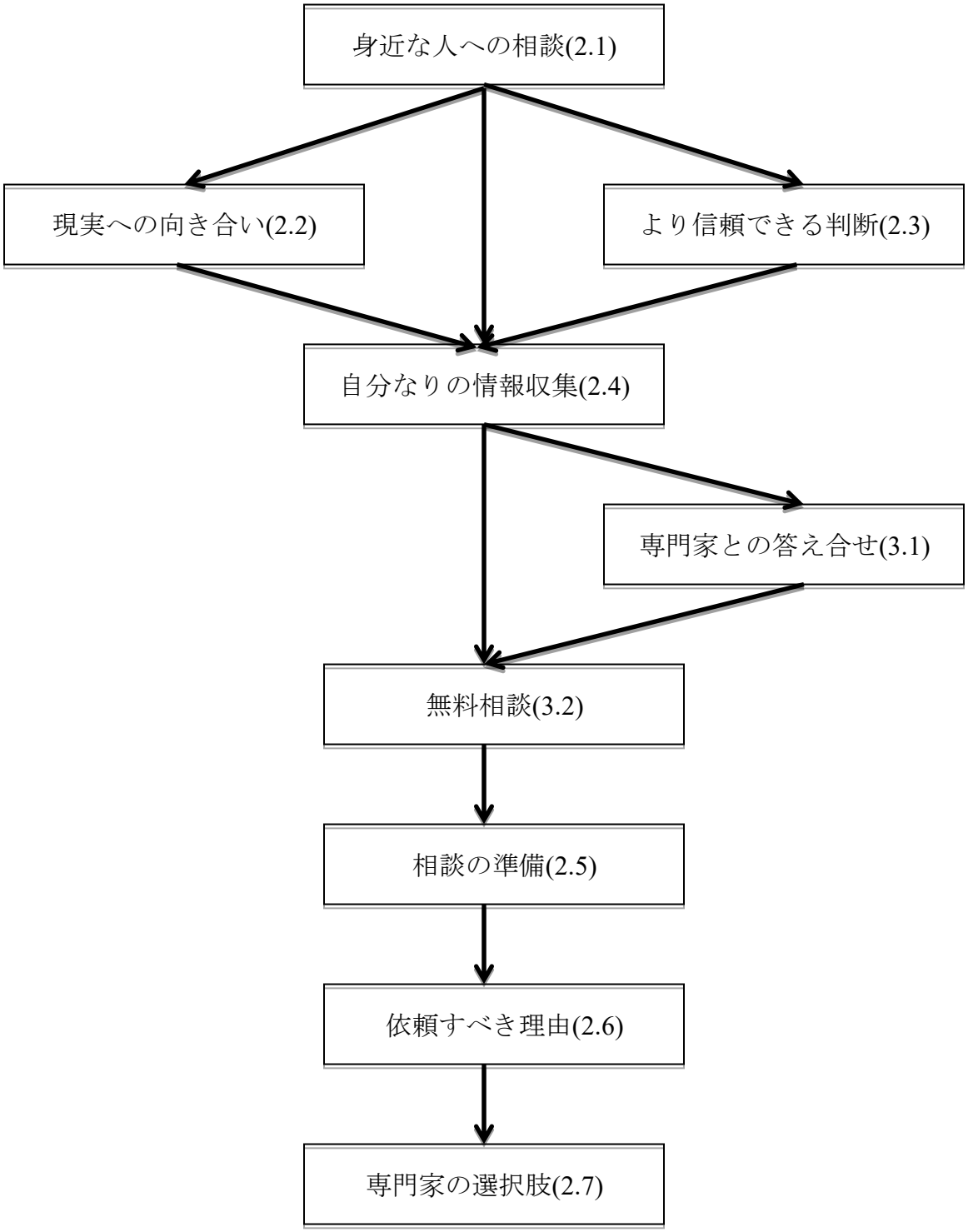

図 2 パターン関連図（余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターン）

5. まだ健康な人が遺産相続に関するトラブル予防の相談をするためのパターンの説明

以下にまだ健康な人が遺産相続に関するトラブル予防の相談をするためのパターンについて説明する。

5.2 「身近な事例」(1.1)

5.2.1 要約

本人に真剣に考えてほしい家族、友人などが、相続で大変なことになった事例など話すことで、真剣に考えることを促す。

5.2.2 状況

家族が本人に対して遺産相続について真剣に考えてほしいと思っているが、本人は自分の問題として真剣に捉えていない。

5.2.3 問題

本人が自分の問題として捉えることができず、何の備えもしないまま過ごし、遺産相続の際にトラブルが発生する。

5.2.4 フォース

- 遺産相続は自分にとっては身近なことではないと思い込んでいる。
- 遺産相続の話題は本人の死と結びついているので、家族から本人に真剣に考えてほしいとストレートに言いだしにくい。
- 経験したことがないので、相続手続きの大変さが分からない。
- 身近な人の話は、テレビや書籍の情報より自分に近く感じる。

5.2.5 解決方法

身近で遺産相続でトラブルが発生した事例などを話すなどして、本人に不安を感じてもらう。

5.2.6 結果状況

身近なトラブル事例を聞くことで、本人に不安な気持ちが生じ、考え始めるキッカケになる。

5.1 「ファーストステップ」(1.2)

5.1.1 要約

情報収集など、まずは遺産相続についての最初の行動を開始する。

5.1.2 状況

本人あるいは家族が、他の人の遺産相続で揉め事などのトラブルに発展した話を聞き、自分（あるいは自分の家族）は大丈夫だろうかと不安になる。

5.1.3 問題

不安になってもアクションを実施しなかった結果、不安が的中し遺産相続でトラブルが発生する。

5.1.4 フォース

・　自分が死ぬことを現実問題として捉えておらず、なんとなくどうにかなると思っている。
・　家族が仲良く後のことは考えるとだろうと楽観的にとらえている。
・　今まで経験していないことに対して、考えたり、行動する最初の敷居が高い。
・　遺産相続の情報は豊富で、情報が入手しやすい。

5.1.5 解決方法

テレビ、書籍、ネット、セミナーへの参加などにより自分なりに情報を収集する。

5.1.6 結果状況

自らの遺産相続に対して、小さくとも最初のアクションを取ることによって、身近な問題として捉えるキッカケとなる。

5.3　「状況の整理」(1.3)

5.3.1 要約

自分の状況を把握するために、事実と自分の希望を整理する。

5.3.2 状況

遺産相続について書籍やネットなどを使って情報収集を始めたが、情報が多すぎて何が正しいかわからない。

5.3.3 問題

結局何が正しいかわからずにあきらめてしまう。

5.3.4 フォース

・　色々な情報があるが自分がどのようなケースに当てはまるかがわからない。
・　遺産相続の制度などの情報収集をしているが、肝心の自分が何を希望しているかを考えていない。

5.3.5 解決方法

エンディングノート等を使って、自分についての情報（事実）や、どうしたいかの希望を書き出すなどして整理する。

5.3.6 結果状況

エンディングノートなど決まった項目に従って書き出していくことで、自身についての情報（事実）や希望を整理することができる。

6. 余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターン

以下に余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターンについて説明する。

6.1 「身近な人への相談」(2.1)

6.1.1 要約

一人で抱え込まずに身近な家族あるいは友人に相談してみる。

6.1.2 状況

余命宣告等により自分の余命が短いことを知ってしまった。

6.1.3 問題

事実だと受け入れることができず、一人で悩んでしまい前に進むことができずに時間だけが過ぎてしまう。

6.1.4 フォース

- 自分の余命が短いという事実を認めたくない。
- 相手もショックを受けるので、確実だと思えるまで相談したくない。

6.1.5 解決方法

一人で悩んでいても、前に進むことは難しいので思い切って家族や友人など身近な人に相談してみる。

6.1.6 結果状況

家族や友人など身近な人に相談することで、自分に今起こっていることを整理することができる。身近な人から助言をもらうことにより、前に進むために何をしなければならないかを考えるキッカケになる。

6.2 「現実への向き合い」(2.2)

6.2.1 要約

前に進むために、現実に向き合う。

6.2.2 状況

家族や友人など身近な人が余命宣告を受けたが、本人が現実として受け止めることができない。

6.2.3 問題

現実から逃避してしまい効果のないことをしてしまい時間だけが過ぎてしまう。

6.2.4 フォース

- 本人は自分の余命が短いという事実を認めたくない。
- 病状のことで頭がいっぱいで他のことを考えられない。
- 残された時間は短く無駄に過ごすことはできない。

6.2.5 解決方法

遺産相続などの問題を放置されると残された人がどれだけ困るかなどの現実をはっきりと伝える。

6.2.6 結果状況

限られた時間で自分が生きているうちに、残された人のためにしなければならないことがあることに気づき、前に進み始めてもらう。

6.3 「より信頼できる判断」(2.3)

6.3.1 要約

より信頼できる別の病院に検査してもらい納得できる診断をしてもらう。

6.3.2 状況

余命宣告を受けた家族や友人に余命が長くないと相談を受けたがどうしたらよいかわからない。

6.3.3 問題

事が重大であるため、どんなアドバイスをすれば良いかわからない。

6.3.4 フォース

- 本人にとって、何か助けになるようなアドバイスをしたい。
- 本人にとって悪影響になるようなアドバイスをしてしまうことが怖い。

6.3.5 解決方法

より詳しい検査ができる医療機関での診断を薦めてみる。

6.3.6 結果状況

別の病院でも検査してもらうことにより、最初の余命宣告の信頼性を判断することができる。最初の病院と同じ判断であったとしても、余命が短いということを認めるための材料となり、前に進むキッカケになる。

6.4 「自分なりの情報収集」(2.4)

6.4.1 要約

残された時間で何をしなければならないか自分なりに情報収集する。

6.4.2 状況

自分の余命が長くないということを認識したが、残された時間で何をすれば良いかがわからない。

6.4.3 問題

何をすれば良いかわからないと、何もできないまま時間だけが過ぎてしまう。

6.4.4 フォース

・　何をやらなければならないかがわからないと行動に繋がらない。
・　自分の状況を現実としてまだ受け入れることが難しい。

6.4.5 解決方法

書籍やインターネットなどを利用して、遺産相続のために何をしなければならないかを情報収集する。

6.4.6 結果状況

情報収集をすることで、残された時間で何をしなければならないかを考え始め、自分の状況を受け入れ前に進むことができるようになる。

6.5 「相談の準備」(2.5)

6.5.1 要約

短時間の相談時間を有効にするために事前に準備をする。

6.5.2 状況

無料相談会に参加するが、自分の現在の状況を説明できるように整理していない。

6.5.3 問題

相談の最初は本人から状況をヒアリングするところから始まるため、自分の状況を説明するのに時間がかかってしまうと、問題解決のためのアドバイスをもらうための時間が短くなってしまう。

6.5.4 フォース

- 専門家に相談をしたことがなく、事前に何をしていくべきかわからない。
- 無料相談の時間は限られていて、相談時間を無駄にすることはできない。

6.5.5 解決方法

家族関係、資産、病状などの事実や自分がどうしたいかの希望を事前に整理して説明できるようにしておくことで、相談時間を有効に使うことができる。

6.5.6 結果状況

無料相談の限られた相談時間で自分の問題やその解決のための有効なアドバイスを受けることができる。

6.6 「依頼すべき理由」(2.6)

6.6.1 要約

専門家に依頼すべきかどうかを判断するために、専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。

6.6.2 状況

無料相談で専門家に自身の問題とその解決方法についてアドバイスを受けたが、専門家に依頼すべきかどうか判断することができない。

6.6.3 問題

専門家に依頼しないと解決が難しい状況だと、依頼せずに進めることで遺産相談の問題解決ができないまま時間が経過してしまう。

6.6.4 フォース

・　専門家に相談したらお金がかかるので必要なければなるべくお金をかけたくない。
・　専門家に頼らずに自分で問題を解決できるかが不安。

6.6.5 解決方法

専門家に相談し、率直に専門家に依頼すべきかどうかとその理由を聞く。

6.6.6 結果状況

依頼すべきかどうかとその理由を知ることにより、専門家に依頼すべきかどうか判断することができるようになる。

6.7 「専門家の選択肢」(2.7)

6.7.1 要約

専門家にも行政書士、司法書士、弁護士など状況によって最適な選択肢があることを知る。

6.7.2 状況

遺産相続についての依頼先となる専門家にも複数の職種があるが、自分にとって最適な依頼先がどこかわからない。

6.7.3 問題

専門家の選択によっては、必要以上に費用がかかってしまう場合がある。

6.7.4 フォース

・　自分の状況に合った専門家に依頼したい。
・　なるべく費用はかけたくない。

6.7.5 解決方法

「相続手続きには、一般的には多数の専門家・業者あるいは各種機関とのやりとりが必要となり、しかも案件により関わるべき専門家・業者も異なる」（東・祖父江，2014）と言われている通り、遺産相続に関わる専門家から自分にあった専門家を選択する必要がある。専門家の選択の観点としては、得意分野、費用などがある。下記に依頼の候補となる専門家の職種と選択の観点を示す。

職種	得意分野	費用（数値が高いほど費用が高い）	紛争解決の対処
行政書士	各職種との窓口（ワンストップサービス）、書類作成	2	不可
司法書士	不動産登記	1	制限あり（訴訟額140万円以下）
税理士	税金	3	不可
弁護士	紛争解決	4	可

6.7.6 結果状況

自分の状況に合った専門家の選択肢を知ることで、妥当な費用で専門家に依頼することができる。

7. 共通のパターンの説明

まだ健康な人が遺産相続に関するトラブル予防の相談をする場合と余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をする場合の両方に共通して使用するパターンを共通のパターンとして説明する。

7.1 「専門家との答え合わせ」(3.1)

7.1.1 要約

自分で調べた情報で出した結論に固執してしまっている人に対して、専門家と答え合わせをすることを薦めることで、軌道修正を行う。

7.1.2 状況

本人が自分で調べた情報で出した誤った結論に固執してしまって聞く耳を持ってくれない。

7.1.3 問題

本人は問題ないと自己判断しているが、その判断が誤っていることに気づかずに遺産相続の際にトラブルの元になったり、時間を無駄に費やしてしまったりする。

7.1.4 フォース

- 家族から自分の判断が間違っていると言われると反発したくなる
- 自分の考えが正しいことを専門家に認めてもらいたいという意識がある。

7.1.5 解決方法

家族など周りの人から、念のため今出している結論が正しいことを専門家に確認してもらうように薦める。

7.1.6 結果状況

専門家の意見を聞くことにより、誤った方向から軌道修正を行うことができる。

7.2 「無料相談」(3.2)

7.2.1 要約

市町村で開催している無料相談に参加し、専門家に相談する。

7.2.2 状況

残された時間で何をすれば良いかを具体的に知りたいが、ネットや書籍で得られる膨大な情報の何が自分に合っているのかがわからない。

7.2.3 問題

具体的に何をしなければならないかがわからないとアクションにつなげることができない。

7.2.4 フォース

- 専門家に相談するのは敷居が高いと思い込んでいる。
- 専門家に相談せずに自分で問題を解決できるかは不安。
- ある程度の知識がないと、何を相談していいか分からない。

7.2.5 解決方法

市町村で開催されている無料相談会に参加することにより、専門家に自分の現状を話して何をしなければならないか教えてもらうことができる。例として大阪府箕面市では行政書士や弁護士による無料相談が定期的に開催されている。(参照：箕面市ホームページ 相談 http://www.city.minoh.lg.jp/kurashi/soudan/index.html)

7.2.6 結果状況

専門家の視点で自分が状況における解決すべき問題点や、やらなければならないことが明確になり、今後のアクションの指針になる。

8. パターン利用のエピソード

本論文で提示している遺産相続に関するパターンをどのような流れで利用して問題を解決していくのかを理解するためのエピソードを紹介する。エピソードは、毎年複数の市町村における市町村主催の無料相談会において、遺産相続に関する相談に従事している著者の経験を元に作成した。パターンを利用している箇所において、パラグラフの末尾に［パターン名称（パターン番号）］の形式で対応するパターンを示す。

8.1 豊のエピソード（遺産相続トラブルの予防に関するパターン）

美咲は、昨日同窓会に参加した。しばらく会っていない友人と再会して色々なことを話したが、特に印象に残ったのは、友人の同居していた父が亡くなり遺産相続のトラブルでとても苦労したという話だった。その友人も親はまだ 60 才手前で亡くなることなど想像もしてなかったが、突然倒れてあっという間に他界してしまったということだった。特に兄弟の仲が悪いわけでもなく、揉めるとは思っていなかったが、兄弟の配偶者の意向もあり、遺産の分割がなかなか折り合わず、結局住んでいた家を出ていかないといけなくなったということだった。
美咲は今まで両親は、いつかは亡くなることは頭で理解していたが、友人のリアルな話を聞いて急に不安になってきた。「両親は自分の遺産相続についてどう考えているのだろう？」」と思った美咲は父の豊（63 才）に聞いてみることにした。
美咲が豊に自分の遺産相続について聞いたところ、「まだそんなこと考える年齢じゃないし、もしそうなってもなんとかなるだろう」と言われ、ますます不安になってしまった。そこで美咲は、同窓会で友人から聞いた話を豊にしてみた。自分の同級生の父親、すなわち豊と同年代の人が病気で突然他界してしまい、友人が大変な目にあった話をしたところ、豊もすこしは不安になった様子だった。**［身近な事例（1.1）］**

豊は、美咲から美咲の同級生の父親についての話を聞いて、「自分が突然死んでしまったらどうなるだろうか？」と考えるようになった。しかし、具体的に何をすれば良いかがわからない。「そうだ、本屋に行ってみよう」と思い立ち、近所の書店に足を運んでみた。きっと遺産相続についての本もあるはずだと思って店内を探してみると、今まで気に留めたことはなかったが、遺産相続についての書籍が何冊もあることがわかった。何冊かの本を手にとってみて、読みやすそうな本を購入して読み始めた。
［ファーストステップ（1.2）］

豊は、遺産相続の書籍や、インターネットの記事を読むなどして、遺産相続についての情報収集をしてみたが、とても多くの情報があることに驚いていた。中には情報源によって明らかに矛盾した内容が書いてあり、どうすればいいのかますます分からなくなってしまった。美咲は豊から話を聞いて、友人が親の資産について、何がどれだけあるかも判らずにとても苦労をしたという話を思い出した。何をするのが正しいかは判らなくても状況を整理することは決して間違いではないと思い豊に薦めてみることにした。遺産相続について美咲も色々と調べている中で、エンディングノートというものがある

ことを知っていた。美咲は書店でエンディングノートを購入し豊に「こういう情報をまず整理することが大事みたいだよ」と言って渡した。豊はエンディングノートを見てみると、まずは家族構成など事実を書いていけば良さそうだったので、「これなら書けそうだ」と思って書いてみることにした。[**状況の整理（1.3）**]

数週間後、美咲は豊に「遺産相続の件はどんな感じ？」と聞いてみると、豊は、自分財産はすべて妻と息子の大輔、娘の美咲に相続されるので何もしなくていいという答えが返ってきた。美咲は、友人から、遺産相続の際に資産の内容がわからなかったり、本人もよく認識していない財産があるなどして大変だったという話を聞いていたので、もう何もしなくても良いと豊が思い込んでいることに不安を感じた。美咲が豊に「もう少しちゃんと考えよう」と言っても無駄であることは、判っていたので少し言い方を変えて「一度、専門家に答え合わせしてもらったらどう？」と言ってみた。豊は自分の出した結論に自信はあったが、念のために答え合わせしてみるのもいいかもと思った。[**専門家との答え合わせ（3.1）**]

豊は「専門家に聞いてもらうのはいいとして、お金がかかるんじゃないか？」と美咲に言った。美咲は以前、市の公報を見たときに市が無料で専門家による相談会を開いているのを見かけたので、豊に薦めてみた。専門家への相談は敷居が高いと思っていたが、市が主催している無料相談会なら安心できると思い申し込みすることにした。[**無料相談会（3.2）**]

8.2 さくらのエピソード（余命宣告を受けた人が遺産相続の相談をするためのパターン）

さくら（70 才）は医師から末期ガンであると伝えられた。さくらには 40 才の同居の長男鈴鹿と 35 才の娘の花がおり、花は結婚して夫の龍と 12 才の孫の風花と一緒に他の街で生活している。夫には、20 年前に先立たれている。

さくらは、末期ガンでこのままだと半年の命であると医師から伝えられたが、まだ現実を受け入れることができない。鈴鹿や花に言うこともできずに一人で悶々と「どうして私が・・・」という気持ちで隠れて泣いて過ごしていた。

さくらは、一人悩む日々を過ごしていたが、米国在住の友人のベガが来日するということで 2 人で会うことにした。ベガは親の仕事のために高校時代を日本で過ごしており、さくらとは高校の同級生で、気が合った 2 人は親友になり、手紙や最近はメールでもやり取りをしていた。

ベガと一緒に食事をして近況を話した。せっかく会ったのに暗い気持ちにさせてはいけないと思い、明るく振る舞ったが、ベガから「さくら、何か悩んでる？」と聞かれて末期ガンの告知を受けたことを打ち明けた。

ベガは、さくらの話を聞いてくれた。特に何をするべきだというようなことは言わずに現実として受け入れらない気持ちに寄り添ってくれて、いつでも話を聞くからといってくれた。さくらは、気持ちがとても気持ちが軽くなった。[**身近な人への相談（2.1）**]

さくらは、ベガにメールでやり取りするようになった。その中でベガから「家族には言っているの？」と聞かれた。子供達がどんな反応をするのかが怖くて、さくらはまだ子供達に打ち明けることができていなかった。
ベガにまだ子供達に打ち明けていないと言うと、「黙っていることは彼らにとってちっとも良いことじゃない。家族が大切ならちゃんと打ち明けるべきだ」と言われた。
今まで、さくらは自分が家族のことを心配して黙っていると思っていた。夫が亡くなる前、夫はさくらに余命が短いと言われたことを打ち明けてくれた。もしあのとき、夫が打ち明けてくれず隠されていたらどう思っただろうか？と思い家族に打ち明けることを決意した。**[現実への向き合い（2.2）]**

さくらは、花に連絡し会いに行き、医師にガンを告知されて余命が半年であることを打ち明けた。
さくらは、正直にまだどうしたら良いか判らないと今の心境を話した。
花は母の話を聞いて動揺した。事が事だけにどうしたらいいかわからなかったが何か力になりたいと思った。夫の龍に相談すると、とても信頼できる医療機関と繋がりがあり、そこで受診するように薦められた。花はさくらとその医療機関に一緒に行くことにした
[より信頼できる判断(2.3)]

さくらは花と一緒に龍から紹介された医療機関で詳しい検査をした。医師は、さくらが患っているガンに関する第一人者が担当してくれた。医師からは確かに余命半年であるというのはおかしくないが、現在開発されている新薬の臨床の条件にあてはまりそうだから、新薬を使ってみないかと薦められた。
新薬を使っても、命のリスクが高いことには違いはない状況だが、さくらは少し希望を持つことができた。

さくらは、少し気力が出てきて、自分が死んだときのことを考えられるようになった。治療がうまくいく可能性もあるが、半年で死んでしまう可能性も十分にある。治療を受ける以外にも残された時間で何をすればいいのだろうかと考えた。さくらは、街の大きな書店に足を運んでみた。
書店では遺産相続に関するコーナーがあり、さくらは色々な書籍を手にとってみた。自分なりに情報収集してみようと思い、何冊かの本を購入し、しっかりと読んでみることにした。
書籍を読むと、遺産相続について考えるのは、決して後ろ向きなことではなく、家族が幸せであるために考えておくことが必要であると思えるようになった。死んでしまうリスクは高いままだが、しっかりと後のことに備えた上で、治療を頑張ることをさくらは決意した。**[自分なりの情報収集(2.4)]**

さくらは、鈴鹿にも病気のことを打ち明け、自分の決意を伝えた。鈴鹿も動揺していたが、さくらの決意を受けて、一緒に頑張ろうと言ってくれた。それから、さくらは書籍だけではなくインターネットも使って、遺産相続について調べるようになった。

インターネット上には、多くの情報が載っていた。鈴鹿はさくらから話を聞いていたが、インターネット上の情報には信頼できないものも多いことを知っており、ちゃんと専門家に任せた方がいいのでは？と感じていた。さくらにそれとなく言ってみても、「自分で調べてわかるから問題ない」と言われてしまった。鈴鹿は、さくらの親友であるベガにメールを送り相談してみた。
鈴鹿から相談を受けたベガは、さくらに連絡を取った。さくらは前の意気消沈した状態に比べると気力があるのが判った。さくらは、自分がこうだと思ったらなかなか頑固な性格だとベガは長い付き合いでわかっていたので、「さくらが調べた内容が正しいことを専門家に見てもらって答え合わせするといいんじゃない？」とアドバイスした。
そう言われると、さくらも答え合わせをしてみたい気持ちになり、専門家に相談してみようかと思った。[**専門家との答え合わせ(3.1)**]

さくらは専門家に相談しようと思ったが、今までの生活で法律の専門家にお世話になったことはなく、どうしたら良いかわからなかった。そうすると花が「市の公報とかに無料相談について載っているはずだから、申し込んでみたら」と言ってくれた。
今まであまり気にとめていなかったが、市の公報をよく見ると、定期的に市民向けの法律の無料相談を開催しているようだった。さくらは無料相談会に申し込んでみた。[**無料相談(3.2)**]

さくらは無料相談を受けることを専門家への相談を薦めてくれたベガに連絡した。
ベガからは、限られた時間で聞きたいことを聞けるように、事前に準備するといいよと言われた。さくらは、家族関係や資産、病状などの事実や、自分がどうしたいと思っているかを説明できるように準備することにした。[**相談の準備(2.5)**]

さくらは無料相談で専門家に相談をしてみた。相談をした結果、特に農地に関しては整理するにしても自分達で手続きをするのは手間がかかりそうだということがわかった。
また、相談している中で、夫が亡くなった際にちゃんと相続の手続きができていない資産があることがわかった。さくらは、専門家への相談で、自分が調べていたこと以外のことも知ることができたが、同時に自分で手続きできるか、専門家に依頼すべきかどちらがいいかわからなくなった。
周りの友人の話を聞いても、専門家に依頼してよかったという話もあるし、とてもお金がかかったという話も聞く。自分で考えてもわからなかったので、専門家の事務所に連絡し、一度相談することにした。専門家からは、自分でも手続きできないことはないけど、依頼してもらった方がスムーズだろうと言われた。さくらは、「ご自身が私の立場だったら依頼されますか？」と聞いたら、「自分だったら依頼する」とのことだった。
「その理由を教えてください」と聞くと専門家は理由を答えてくれた。今回の案件は、家族の仲もよく紛争になるリスクは低そうだと思うが、他人に貸している農地の相続については、農地特有の手続きがあり、現地にも赴く必要があり負担になるだろうとのこと、また夫が亡くなった際に手続きしていなかった資産があるが、そもそも夫の親が亡くなったときの手続きも実施していないようなので、夫の親、夫の相続から実施する必要があり自分で実施するのは難しいだろうということだった。[**依頼すべき理由(2.6)**]

さくらは、相談した専門家に、「遺産相続は弁護士さん、行政書士さんなど実施されていますが、選び方に基準があるんですか？」と聞いてみた。報酬に違いがあることはわかるが、何が違うかがわからなかった。

専門家は、「私は行政書士で、行政書士は司法書士や税理士などの先生と協力して仕事をし、依頼いただく方に対する窓口になりワンストップサービスを提供します。でも、紛争解決の対処は職務上実施することができません。紛争リスクが高いときは弁護士の先生に依頼された方が良いです。」と教えてくれた。**[専門家の選択肢(2.7)]**

さくらは専門家の話を聞いて、遺産相続については依頼することにした。そして自身は残された期間、治療にできるだけの力を注ぐことを決意した。厳しい状況には変わりはないが、さくらはしっかりと前を向いて進み始めた。

9. 結論と今後の課題

以上から、遺産相続において、健康な間に自身の問題として考えて専門家に相談するためや、事前の準備が十分でない状況で、余命宣告等で自身の遺産相続の問題に直面した際に、専門家の手を借りてなるべく早く問題を解決するために「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」がどのように利用できるかをエピソードにより示した。一方で、「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」には、以下の課題が存在することについても認識している。

9.1 本人に家族がいない場合への対応

本論文で提案した「本人・家族のための遺産相続の相談に関するパターン」では、本人が自ら遺産相続について真剣に考えないケースや、問題がないと自己判断してしまう状況に対して、家族が利用するパターンを用いて、軌道修正を行うが、本人に家族がいない場合は、その軌道修正が困難になると考えられる。このようなケースに対応するためには、「おひとりさま」を対象にしたパターンの拡張が必要だと考える。

9.2 専門家による支援のパターン抽出

本論文で提案したパターンは本人やその家族が利用することを想定しているが、支援を依頼される専門家が利用する遺産相続を支援するためのパターンを抽出し整理することにより、遺産相続の問題を抱える人が自分の希望にあった支援をスムーズに受けることができる可能性が高まると考える。

参考文献

1. 東、祖父江. 2014. *相続コンサルタントの実務マニュアル（中央経済社）*
2. 細谷、堀ノ上 .2019. *本人と家族のための遺産相続のパターン(AsianPLoP2019)*